へ13
1306
5

遠13
門
號1306
巻5

未詳妹五編の叙

妻月色人今二人妹
燈ま妻月を勝ル妹ニ妹月色人今二人妹
が世話ゃて妻月観て仕まつるふ
大ごの妹ごいの妻よく人の知ごぬ
差ぬのうべきもあるまじく、
四時ご雪ごの牛憩あり。既な春し妹ごのまひそ。

の
源氏物語もゐんゆうの書
なり。書風ゆうえんの
いきをえたり。
かなの書物のさうし
ゐうが
料紙まき絵物語の由
来なり。
おもしろの風あり。
元そ小法師史の類ひ。
なかたちを楼せて。
あまたば武いわらぶ
悦志めく。
順を解の
あるは普通よく風合すをもて上手
婦女子の伽冊子。まの
事ま本屋い風用ち
信ぜんはなの品世風
書のうえ。新まの
まの頂点ねば。故
糊を納る刀 筆

さてだれおもてのせんこう
れそのまうい
年玉よういこそさて
砂や林の木はまたそのまま
ある
井いもまだまだ
ありよく
着そうな
三番のまく
作者

貞操美談

松の花

全本 十五巻

松亭金水作
歌川國直画

文溪堂蔵版

此まゝハ作者殊さらに叶紙ふくそのゝ人情の濃さ浅深を見せ度ものゝちがれバ教訓ばかりにて同じ雑せざる事さんべく一回考を閲くれ玉ふ紙数尽ふくして寝ることく忘まうといとおもしろき物語なり

酒の名ひ妙薬 花精水

梅の雪

初編 梅乃園 浩代六十九翁

磯よ神ハ酒ふ分てこそ富貴の人も一粒の光ぐちまちまとする善悪の報ひ歴然たる酒家に生れつくべし

閑情末摘花第二編巻之上

第九五回

東都 松亭金水編次

九そ婦人の精利根ハ。緒の書ハ。殊ふ兼好ハ女の性の癖ゆるよふを戒ふ。よく〳〵慎こよく思ハざるべからず災害の元ふもとき出ふ。さるべ放ふと他の閑ふのろそ遍つるものあり。程害をよく〳〵慮ふできそ。その冥ふ報ハ更ふ後悔の更ふ。當下清精

押拭ひ孝世が袖を引とりて 清「ハテ少しお長閑さるゝヨ。さう松ハ
米さんが。是ッ限抔らるゝところで。そまつ
めりません。三年あのうと米さんの。お座て人並ゆるして居さるハ
歳許ござるそうのう。たとへ死ぬ時ハ。何ぞ押うけて
引廃を仕まひなりのうと。あゝ〳〵勿体ない。
来てこゝをごらうじ。その訳ハ判ざますゆへおまへ
万吉つれ男更されてあゝ〳〵歎くまで。ござる万吉助の女個
ゆへと拝んで万吉ハ。米次郎が叔母ゆへ。あの男と米次郎が

海の中へうき沈て死おはびさるゝ。なんと
たとへ年ハ明ぬとも。私がめうと男更して。死せんと。
思ひ居さるが男気の。切り易さと云うぢら。今回あの叔母を
助けて。親戚一同不面目な。女を娶ふそうのう。何て卒
しそこの縁談を止さすやうと思へども。固来。當人同志の
出来た中で。延引するも気の毒ゆへ。強て止やもさせられず
さるゝとそこその女の。親とやら奴が名うての悪党ぢ。と聞
ふ歟して金儲ける積り。五拾の女を持して八。

住く家のとうゆもうさぶ。何ぞ丸ふ故陸が出ること。夫を僥倖
破傷ふさせまさぶ。茶代弟が男ふ丸ても徹倖よるる理屈。そい
で種く工夫ーてぞれとふのさぶ男更ーとふ。不残茶が惹女とも。
表使のうふのう半まぐふ伝そだどあうう。今日が日まで活麻
もせぶ。化ふ同指ゆーて垂とふもの男ふ。叔今夜ふもの男を。
いよく近つるとのふるで。今朝うらの大浜銀もれで遠府ーー
て番まぶ。それと故陸ふまづ今夜の。野礼ふ延ふふのうと左指ーそ
海で伯使の久仲合。着つとうふ方ををつくと。晩中まるる
仔細ふの。おうーー自己が指揮をーそ。押ふけるとりのふ。
電気ゆも中ーてふうふね。自己小延そも。不視不加の顔で
居ゆやア脇るのと。指めそ中ーとふ男更の入覆むるやうふのれど。
たとふ駅仁西ゆーろ。定ふてまで。うふとを私がちやくーのとそ。服ーそふ茶さんの思らくとのひ義理も立ぶ。仁指しーとりのと飯舎の思様もつふね
その中ふ。サア延くうる今うち仕と。元勝さんの為五史。
私も実ふ恥まてく男の。餘而の女と野礼と。ふのそふさめく

雖ーくも。おりくねまへの流れろめらッイ出まるてとを渡
おりひ。速ふて仕さ白羽根町。まくさら彼りへ彩りへと。万
ちうさんの教もめとで。ますさろ心ふうのてとを平松よりくと
もせび。元詩さんふ仕ーてあのそ。私ハ云そ居ますーとづ
僕で思ふやうでハまー。雲孔雀淮綿のきらびやう。おりひも
よくも故障が出て。さぞ茶さんがーと思つてら。程度不ことの
胸が。張裂やうで辺みてと。後悔ーても後ま先後うら兵
校仕やうこの。万ちうさんが口宅を。ヤレ雖ーやとおつてと
早ふふおりまーて。叔母ふ御ハ何ろうてう。夜も寝ーてハ校
じる西へお帰ーお出で今の彩ーた。在松ーてうまハ万ちうさん。
の彩ーとハ丸で違ひ二年ぶりて最のある茶さんを私ふへふ。
勉強さ年さのこうてハ。モシ万一ーて茶さんの。身ふ過ぢめの
ようら私ーら自教ーて同参ーア仁松ーてトノ宜らうと云
も絶らハ平伏て。ますも幸ーますねー悪ーくこの。涙ら停ふ
がる仁のまあてめうまそ。ア人利刀を。逆ふふ持て吹へ突ま
倹のを画引ーまそ出ハ利刀を。逆ふふ持て吹へ突ま

きるを見るよりも。妻世八驚てその手を押へ
何故そのご工ト尚るを見るより清ハ助ハ。跳り入て刺刀
を。取もつ間もあらバこそ「その女ハ。何故まことを私に
似をもるのぞナトのくまそ清兵衛。涙をそゝひ清一何故こゝハア
離りござまを。私ゆへ米さんが。万一死んでも志るのと
きゝて承引で居ることやうも。狐うつ見てとら狂気とも。迷上
こゝも思ひみませうが。各くの方ふ。何故
こゝへ来てそやるとゝいふまでこざりて
らるのが。今りよ通り左招さんすれバ。能く味と結句嬉しいやうも志
君ぐる女の縁を断て。私を宅へ来うら思つてござ居のこと。
まことこゝと思ひ。死てそやると日来
嬉いやうで。ついく。まこと乳の毒ゆも思つてけまで。打角化
の伝切を。まこと思ハ亦て生世の狂魔と。ゑりのことふうくふ。
好ゆも志こゝ白羽根町へ。往くが私の遅の猪悪して呉
ますト泣き倒話の手中ふ西赤く染青く染分て投伏

清之助

して悔歎く。當下表ざしきまでまで
分解ざ。日来うゝして実伝とへ。初めてゐる清路ガ孔雀の
ごと思つてさうゝ女個を恃んで死ぬとのそせ。心引ホ来てこれバ
楽のごとく化の曲尺コレサ清路死ハヽヽもヨヽヽ。
け合ざトそ考ゆつけ清路ハ。哀しの中ホ睦ましさの笑ホ
まつひて顔を見あげ。涸ゐをひつと吻ゝ清一キヤまア悩ら
しのへ。私きもアまこと思つて。仇花ホ哀しうざゐ
ちらう。実ホ形して居る霊ハめうまんぶ。そまでやう

勤着されことのかのも。不孫申ざますト胸うで御侍へ参
拳勤着ハ正夫サ。ちうゝ今の説できけバ何もかもちうり
分解と。伝でもそ花ざるのざらうと。推量ハして居ざて。
ち助めも驚ホ」まて。叔母と一味合体う。ちうゝ仕組表
ざうでもちう。先さゝ着つて支度を出さびふ。着うけの
出来ちこハ大着りざ。ち処で清路まざお祐の胆をつぶそこ
とぶめる。そ院婆礼をちやうとの女ハ。お祐ガ妹のお里サ
ト夫より細ふホ一什のことを。院婆ハ清路怕ゞしてそく

績く。侍命ふ。母ろ三人ゞ男の艱苦のつはものそまぬ難渋
を。心ぐるしく思ひそめ。ゐるふ甲斐るき仏男のそろふさ。
朽く母ゞ訪書伝ゆも。そゝとて奉しそふ季の。心だろふふ
貢ても。女世常のやうせうき。説話きく様のさ程。
まや〳〵男侘ふるつとうふ。母ろみこ三人作〳〵ふ乞食せるとも
侍ふ居て。夢〳〵うろ〳〵ば姉〳〵うろと。平生ふ思ひの給るさ。
添て苦界のうき勧め。人ハ矢よりも早〳〵とのふ季を光陰
ぐふ待幸く。幸の明のを美くてもゝ長いうちこそ明らめ

よけど今年年ろ一年ふ。ろうそいよ〳〵どろ〳〵き。月日の
うちふ男更され。詠ぶ間も仮のその。化の汁滅のお先ふ
されて。思ふお方ハ夫少ふ。動者の男と寝く時ハ。ぞ離〳〵
さふ面倫の胎をいろて我程少ふ死るふとまでも思ひ
を。まこ川久て縁の。世ふ来生る季お説母さ人作ふ楽る身
と。ろう〳〵千夜万夜の。金を仕男ふ業ひ〳〵まう。うそ〳〵さ
離るゝのふの。姉ゞ思ハぬ乞うら。千客乱を防げく。苦
労さまるゝ什麼仮の因果る指ぞとまと繰久も。楫の

そーぢき百羽楊枝は流てもイヤ伝もめも不残時ふせ。悪風をのくバ限りもふいる。ゆ。ゆ。明く北ふ志ま〻そ〻ま〻バ。ヤム方ゆもまさ住宿がある。今日元人の来さうへ。誰も志ろわくら狐内こで。サア白羽根町く巻そくまろと。胡ふ晩ふ万をつさんと。志助をおりの三妻つけうせくその内ふやアヤム方で。て善をまろるゆがある。ヲ〻の赤〻慈母ともよく〻お供しそこそ越さう。最居へおそまでござり堂との百。大きふ風をおとる。〻〻サア清さん

老世も羊でも垂さめく〻う。久〻しぶりで一杯とのひ飲所ざ。左様して居るうち催そ大きふ忘るゞ悪い。サア参も。上まバ。今さら名残惜まれて。ゆ〻ともるき風信へめまと。ゆ〻して流まるうちゆも。万をつち助が来へせぬと。大ゞ陸ゐくさゝつても。たつと脊伸ふ入口をヲ久〻る悪ひも。切うそまバ。面ろんよ〻もの。夫うゝ庵人さんの妻元よう。性分悪女でと喉乞。ろま一堅田小酔居る。ゝの

一連なりとさち。添かく侍の夜雨寂寥とうるふけ是より茶水弁へ。の恩ぐ屋のお里が家ふ。老世帯諸ともふ在お里へその夜より。白羽根町の銀見色ふ止まて。茅くと書をと初るべし

第九六回

祖を故りて佛ふうくば。神田町へこの佛ト量の儘ふ唱へ〳〵ぐうと今より昔のゆ。仏の加法う祖うち吹うう。腰ゆへ一ツの冷と提て。チャうく。紙屑買。声と

よく〳〵買ト絶る声をふり売ふく。小商市中よびあるき。現よ世の間を茶ゆ〳〵る人。安楽寺ど唐のまん中橋。隅ゆへめぐる中通り。表へ格子の二間口。縁箔所と木札をふ。二階へ久治が汁繰場ゆ。能く深の赤樫花。四時の英花鳥の彩色ふ工そく〳〵る絵ふふ。氣根を養〳〵後の方。除くとお湯へ茶碗と土瓶を持て二階をめぐる一お客様へよく〳〵根がござ升ませんよ。も桐生の織元うんどで。種くる挿花を織ますものをえて

を居ること。隊ふ胆が浮まる申うでおさるままヨ。何故ーて彼
出家るうと思ひますへ久「めやア私どもの計線よう。花
大変でごらうヨ。糸を織合ーてその枠花をもつうつこせる
のごううむづうーそうご。お越へ相生でごくーと言て。歳千実
ても誰とのよの女児ざとゆーるさうわへが。実考へてこる
と雑り面白く後へと思つ申ヨ。今ふ私とまヨ
そうやア左様でもあらうが。善悪も大きふ幸ごて居る
のサ。年売私が途で重て。子園ーと縁う妻花様うう。ワイ

そこと異ふ場合ふなんざうん。可愛くつて捨るゆやア捨
らるゝで一日くと引ーて居るけど。実を言てそこと天
うう降とう地うう涌とうまさ行の花ふ撫り合つめるう。都と
移へ女児を能乳ふうつて。恍惚て居ても。餘りつまら後へ
と思つのサ。「アレサそりやアこりや百も申も通り私の考へな。
並とも乳垂へろまませんと申すのふ久「そりやアお前の心
持でへ左様ごらうが。よくへ何ごう仕方でおん
心ーねへ申ごヨ。「そーて安心るようのうう。出て

とお思ひのう工 久〳〵うらまで葬う始まつて。左右思ふ位うら。
誰も気配へ仕舞くのサ。ちうしーお前の一方でモウ他こちう仕て
仕舞つてよと思ふうち。詮方がわくへ。ちよつめまも西あづく
じやア没さうのお。是お丸。傳お西へうつ。勿論お
ちやア四方の景の晴で。まつて〳〵きづ山花のあいだちよと休
へけまで。ちうして他の景の経拵をするお外そう。山花
お西へうのを忘せて見ぬりのご。左右〳〵ちよまと一段
能舞ふるうぢうと。実ふる康なみよどご。今ますでハ何と
ん花なお立派なお地を建うて。竟ふ松のうんぞと思つてるうハ
うのこご。仕濱ハ何ぢう女の景お見ふ外てるうわんのョ
マこうまく時〳〵ちよと出ョ。そりやア大うと門違と申して
ごぢかませう。イヤ左右思ふちやア嬉ら和。化ふ何ごろ
のう。イエまでも景お丸ぢ。山百左右お作ましと。久
治もモウ一頻ハ放蕩で。おふ宅ゆハ居びまふ統ちやア
理な傳令もちくり。傳ふ国のごご
うて。吾倘も安話しと。何卒ちよと思

つて居る処でございまして。親御様も兄弟も其の外うとお
云ふ。兼の通りのごとく弘作ます
何ごとも一ツ一ツ私が左様致りますと大きに仕ござるます
が。何様も私のやうな不束な乳母やァ
入ませんとやて参ります。ごまふ左様でござるますりのヲ
久〳〵左様〳〵ごうもあるまふ入ませんやうの中ふ
月元もゆさ〳〵ござるふ。乳離のふりのふ
のう〳〵まふござふ。何卒左様仕るのでも可笑

ふつて下さるまし。若こまの眼様ふうと。私ふ死で幽霊ふなて
出ますヨトのふ打ふう表とあみて小僧の参ふ一ハイお情こや
ますアノ丁子屋ふう参りまして。十ふお銚へやこ。漸夜営の
経りのハモク出来ましてヨト此そ久治ハ階ふを二三度もり。下を
取のそ〳〵イ種〳〵名通で居てまず出来ませんの居貝ハ名
上ります〳〵山浪ふお酒ふうふますふう。何ふ合ふいと困ます。
今夜ハ百遠ふ〳〵お特やますふ。ハイ〳〵モウ百遠ハ仕ません何
卒〳〵やてお呉るさい〳〵ハイ左様ふうト内る妻ふやこやこと

紙屑買ひ亀七よく〳〵買と心得て久〳〵待つけて紙屑を
売やせうと云ふから下へおりて。押入より呉服紙を取出し
の。反古を把出し〳〵て久「サア是までだ。正吉ふ亦よく〳〵買ふ
ちやア売れぬせ「ハイ〳〵四ツ在ますから頂きませんと揉を出して
みる。おうふ。弗と眼ゆ〳〵党のよ所。綴の中ふめりそんて。
久治八妻へ反出そ。綴よりするく〳〵引出せ八日向ま切二枚ぞ
うりゆ。徐ろ〳〵と前の反古宛名八相生万ちう板下八武
さーや右助とある八。叔の名前ぞ亦ひろみとバテ
不測と。十行だろまを読下せバ。今五ツのりの文体ふまづ
ろ〳〵と巻納め久「この反古八面白いま所ぐろう。私ふ売
て呉る。十六文だろまふ買ゆ「ハヽヽ旦那も。そんぢ物数寄
る方ぢや久「イヤサ十七拓る扇屋単を。ぶつ潰しやうる
ま所が好サハヽヽ「夫ならこまへ二百ふ頂きます。その
反古八お買ふ上ませう久「左拓ろエ。そうもやア粒妙ごとりく
紙屑買へ紙を西。綴を揉でチャン〳〵紙屑買と行ける。
海ふ久治八乙世の桑。ぬの紙屑の躰をのそ〳〵久「何でも

紙屑買ひ
奴の謀計

叔母のお添お遠くに独くがハテ異な文ぢゃく兼てお情このお白羽根町の一件お里の方も随分とお世話様ぢゃく。ト後よくお聞ましと。夫ぶつき清蔵もいよく〳〵賭事の咎ぶ振返ろうのを苦実ぶ妙斗ぶ仕ぢゃんハテナ。耳くに挟んだ噂の高談を仕清一ト先ぶ朱ぶ交ぢゃく。何ぢ」お添さゑの仕方へ私も従く旅一出一十すべくんト僕終そまと考へ久〳〵何ぢろ一向解せぬ。清蔵とハアノ二浦屋のお志らんぢゃく。夫が賭事の咎ぶ振込とハテ不調ぢまとお添さゑの仕方とのも異ぢきざろくト若ハ夫うと心のうち。何うる清へ密と聞て。尚より吃驚るお添も呵り寄〳〵まやもアとまハ不調な仕方へ。何を隠一ぜう相生の万ちゃつとハ吾倘が親の名。そもとも何様とおの様ぶ久〳〵十二お前ハ夫のお志らん茶汲弁さんの親ぢゃ。アノ幸世さんが既ぶ性様りの方ぢゃ〳〵何様一七夫をお茶様が久〳〵ハテ初〳〵で何様するりのト夫より福見屋へ出入のことぢ。まとハ幸世ぢ始末の相。活倘べとるとも不調の男ひ。

今回又の万ちやうと。来ると時よりの一仕一什。今〳〵く治ま
久治へ笊。始て知るお浜が孝行。感心〳〵。独
だあり。まと組で居ようーが思ひ付てやるけん。独
ろうぐ点。その打ちう。悟り久治へ合ちやふ。わてー
顔。するより久治へ合ちやふ。わてー此手と異ふ仕り。かの
反古まも儲できうせ。作ふ術が頂ぐるそあく喘急毒ま。
別人まるね叔の左助。居ると逆ーと母親の。沖洋へ左助が垂く
まりて。物いそんとする景勢ふ。久治へまぎと押隔て久へ

叔さん何ごそ。大造急のでお出ちやへ。世気の様る理が
あつそョ久へ。そやもア何ごう気ふかくる。まア何方ふ理立ト何
久けらそ面ふ乳ふ。額の汗を拭ちう出ん手越で走ぐく拭
を「姉さんも。さーそふ久治もまア此そ異る自己アうまう後
こと特まれて。ウレとこてこが男の本肯。今更後悔ふ万サト
いつふ久治もその如も。夫とふた大うこ岩ーこのぐうも。気
して理をきうけば左助へいよく。面気ふて。彼万右ふう情
ままそ。笠招くの按汁をうまふ。思ひ表ぶも主夜より。

米だ弟八動書うけ。お里八白羽根町ホ廷まるまでで
委しく語りてを「実ホ梯かる行て困りきる勿体ま
さんを困らしてハ後を困やうとの万ちつさんの按汁で。
清話ゲ月夜うら。何うホ拙て一本まや。そのらの本銭を
のまその取る。とハいかりの米さんゲ勘當さまてくとこハ
思つわ人ゲ。不憫ホ取りてまるとやア不残往ごごともこまび
心で後悔をるだろりご。てア久治ホう人何拓をくら。豆らう。
そう方もお世倍ホるる具ホのる。実ハ叶拓ホをる徒アご
やアをうくさけまご。イヤハヤそんご路番ホるうとのサト一什の
勢しホ懐まり。久治ハ由の反古を元半して夫ごやア山
多前ホ学ゲのるまをうまト古助う徒の倩へおけば。古助
ハ一服煮て不精良を「ヤごうこうして是ゲト縒るくを母の沖
津も猫すると妻せ「吟バきくわご了強う。誠ホ呆まと
けへつとおさ勿論た拓りの理で又まバ万ちつさんとまタ
の服をか。まんざら委理でも利りうくう。何もお義ゲ一味して
話ホる具ホとのも利りうくう。何もお義ゲ一味して

ぶんな具合ふ苦労をうるのでも。全体どふ
世でも。男一ぴきの力で左程くさせるい。早速売いそで。そのお酒が
家出をしやうと起つてくる。サアそのお酒ハ迚も
でもくふ居るヨト酒ふ居てるお酒を薦さー「コレサお松ゲ居
るか斗りで。夫ゞどふ発ぎふるつてム処く寿こと時何もかも。
お母さへ早くふ。白羽根町へでもまつてお酒ハ今きらふ。何といつべ
き訳さへ。「ハイ〳〵」顔を傾て居る。お助ハいよ〳〵作天へそ。

ナニこの腰ぬけお酒さんとふ。イヤどうも呑らへい。何処もこふ
居るまみが「ヲヤさうふ居るろふ石剛さ。そ理ハ違ね
ことゞ久治ろ使ひまりしるを出せべいよ〳〵強くち励ま「
別いよ〳〵と別つてくるろ。乳ぬ
さんをゞその侭ゆしちやア毒まこれ〳〵「そ処で米さんの居れを。
叔さんハ別つてお在ろを「サアまづ動まうやア仔細ハ松〳〵大
うこ思が居のお里が方と。推量ハして居ても自己へどうも
仕様ハまづふ情こ。米さんの在家をさて

出ー。懺悔不罪も消るとや。何もかもお明て。仕舞を仕給
とのみのご久へのよく〳〵左右いのみつゆるらバ。忍が身人事ゆ
往てなをも「盤ともそやく〳〵と始末を。且ハ
上を。ノウ久治や左右じやアるいう久へトと夫るゝら往てこん
トちや度そまいく〳〵ヨゴ家を立出。忍が居さ〳〵て急ぎ行

閑情末摘花第五編巻之上了

閑情志摘花第五編巻之中

東都　松亭金水編次

第九七回

宮城野の本めらの小萩多をかもこ風を待松君をあてまてば
うんろ　其秀の雁ろ日和のごけき小春月。今日八十まり七日也。大悲の灵場へ。歩こをはこぶ。学職の群集。四川菜飯も田楽
も。賣きるこひの掛札八例もろ。
の廣小路も。究竟楼き往来のゆきまひ。一料理屋の奥二階

枚戸を明けさう迚切て内ぞ座しき両個の客人米次郎とお里
さう。尚より妻時酒つゆ。ふんのもと廿一眼の潤ハ桜海業
桃の花綻びうる天風情。漢語でのふ瞬ハ。今日石斗慈眉
を開と心ふ睛一ふ星が伊まさと一座の老を婚べ一。米次郎ハ
盃をさして。自己の胸を松ふ一米「てやうくくえぐおち
若こ。彼時うくーて今日までこのよのハ伊ぐろえぐむーやく
老やとして。実ふ面白くも可笑くも丸のヨ夫ぢやア老ゐも。
叔化ゲ悔ゐんびうで一妻法を書このごとのよのハ。推量して

居る拍子に「山吾私ふかえるさうめやうよ。お帯も緩めて
お閑楽こ老ぐ。杉ふその通りの理でどうも義理う濁るの
ふ。米を動当してると。宝めて一日も形して居る気ハ五
うう。乳を永くして居る。志うし一伊
まのぶ。夫もモウ筆の内ごろう。乳のうへぐ。今ふ私て風の使も迄。
ふ身ても困るのハお滋ゲ身
実ふ生死せくころうるのくうあぐで体ふ仕婚いのサ。彼ゲ滋豆
でさへ居るところ。伊拍でも仕て志ますと。私作てお生まさ
るゲ。どうもそお滋さんとやうの。行方ハ志ますまいとなへ

米「そうやア毎日のようまでもうサ。まア彼の通りの少女もるん
ぶ今在の半俗ごとうでも。銭まり能度じやア私。法をめく
こと化を脱がせるめやアめそうわく里「ヲヤ大そう悪くおもる
さるお男実利よつきますぜ米「何故く里「るまとうでよく
考へてお見なさいお招小配倒くくをまでだろうを楽こ
ゆて三十里とやうりよ幸い許をうお主のこ有のの何のと
おこうなさるうう。そうやア私を化ゆても何招うもるもふ
るりまさアよ米「大違くく。固来自己ふ嫌て約彼そこ
ほみうう。世さアふ仮もあるけど。傘く左招ドやア私「方
の招推めやア。定まのひ合こて法を陥こ自己ふ雑魚を喰ろ
けこ而が。まも何招やう遠招やう。向よのりふ通りふ仕上そう。
まこ悪巧やこて。頬く自己を通出仮越向ふもこのごとなの
と。実ふ悔さもくやもこ小頬が悩くいて嫌くうもれく里「
そうやア私さんへ何招ごうもうるのが女上この表へ一面彩と
ふりつこ人ふ捨うもつやア。死ぬ気ゆも世を捨る気ゆもる
るの、当然でできるますうう。まご私こうこともるのお滋

さんのやうさけるとで。不意をうごと思ひますへ　何も物と思
ふる因縁が初へのス里ナヤ　ソハ調法ごなまと何も暗合の
るのりのが孤生ーも仕ますまいよヨくゝ述　イヤまるやア遂
越里ー十二迷惑なことがあるまますものう。浴衣が除まり無性
をやあごろう。推こなことが出来ますへまコレサ左様思ひもちや
よろしう考へ実起源ご。須面お前ふ久　ふ無まこて一年余り。情を立通しーこと
のふ自己ごうのナ里ー夫ハ徐ふ妹ーうござりますが。まさる
ません仙台ノ婦我が。板辺で来るやうな

赤〳〵旅まし〳〵ヤインヤ丁度の加減ざ。先刻
来ざ晴へ何ざ色ざ思ふてござらう。種〳〵苦労をまる百度
らうと。実〳〵可愛そうざと里ニお私へ何ざぞうでも。宅
ぉ居での苦労ざござら百ざ。お姑様へ夫ふらう。何ぞ
宅めて悪ざ言の宅へお出なすつて。清さんや岩母さんも お様
ぉ〳〵のるで。就まさるをへ来てござらうと思ひますけまど。俠をまるとへるべ。
さすが お助さんも モ落一向寄つふるらう。容ぉへ寄まべ。今日へ
ぉ〳〵のるで。就まさるをへ来てござらうと思ひますけまど。俠をまるとへるべ。
さすが お助さんも モ落一向寄つふるらう。容ぉへ寄まべ。今日へ
自己も狼ざ下つまし〳〵へ来〳〵そるやア
ござら悪ざ言へ俵で。岩母ゆも遊て安堵さまるざ百ざ百らう接
ござら悪ざ言へ俵で。岩母ゆも遊て安堵さまるざ百ざ百らう接
〳〵そ居らアる里〳〵夫も宅う。余まり遊くるりへ仕ますまいら。夫
ホアノ丁雅ざ来〳〵十二ぉやア百へ宅。自己ざよく〳〵そつけるらう
大丈夫さ里〳〵そんなら在拓のこま〳〵来〳〵サア早く
帯でも寄ぉ来〳〵ナト言まより勤定をすま〳〵こをまる中ざ。
宅くふ勢ざ人通り。殊ふ女の途器級ござわバ。お里をバ

互のこゝろ成
結ぶ櫛
おさと

米沢屋

どの事かせそ。忽ち男人と為りゆく。まふ幸世と清ふ助八茶
汲み出す。その間もあらひ。その間もあらひ。杖
ひ命が情ふそ。まづ悟くふ女姉のあらひ。杖
程と。時こゝ一人の男の笑雑ふ。まくとも苦労の憂ひ思ひ。男
のある墨を卿ちろ。二人二階ふ話ふ話ふ。そのそ
わろふ門にのけて男の袴「ハイ」ちとお情くゝゆきますと叫んで
二階を清ふ助下つて見ると年齢。二十五六の細ふね男清
「何の方ろうお出なさいまし」と男「アノ此方へお置さんのお宅
でござりますりふ清「左松サ。此方の女児をお置とゝまりますが

それ昆も置てみりそそ。此方へ宅ふ居ません。若女も今ふ生活
す。何ぞ用ろう私ふ出作ござて行きいまして男ハ
る。何ぞ用ろう私ふ出作ござて行きいまして男ハ
家の松み。おろくくとろ男「モシ此方よ米さんと
りふお方が。お在ふなさいませんろふト問きそ何と若ふべき間
ふ書時さー語りーふ。忽地ふ男殺して清「左松サ。千客万
方へおりませんふ。そこへ此方じやアどざるますや、男「ハテ何
でもそのお置さんとのふお方の宅ふ。お在なさる事ふ候ます
とゞト此彼方此方をろ見ろ。帳をくろ見ろ。上を世ふ

よる 二階の上り口へ顔さし出して考へを低めて「清さんア人は無
御在所の久治とのゝ人さゝ。私の宅へ出入でゞ。兄さんなれぞの様び
友達ゞ。何しゝ来さうな 清「ムウ夫でやア お里さんの叔父
ゝ来さ。吉助の娘ゝ立「アヽそ人ざゝ 清「ヱヽア何ゆゝろ知ゝ処
ところで何しゝさう宜ゞ大うさその叔父と何ゝ喧嘩でモウ一昨年
ゝゆでも来さのじやアねゝ「ナニ左様でもあるまいよ。兄さん
ゆやア種々世話ゆも来て居る人ざゝらゝ先頃、江町の亀や
の二階ゝ居さ時。私を尋ねて来さ人サ 清「ムヽ左様ゝ

それ夫でやア お客の事で一里ゝ二里を走るダめるゞぞうよでゞとまう
るゝ人ざと思ゝこうけ「ナヤまさ 清「ナニ善悪ざらうゝト
ひろゝ家ゝ入口を。ぐゝるゝと回して茶さんと一
緒ゝ里「清さんは居ゝ 清「ナヤお里さんゞぞうして茶さんと一
伴ふ「まゝゝ姉さんゝ立。まア何ぞお祭りゝして居ますゝ里「私もゝ稽
古ゝ来じて居るけゞど自由ゝ出ゝるゆゝるゞず。それだゝら様で居ま
ゆ出ゝるゆゝるゞず。それだゝら様で居ますゝ善悪ゝ変るゝへ
「アヽ先刻、名波様て来ゝ。気を利かしてお呉と

おそでゞ何処へお出でゞ。まづ久
しぶりだ。ほんなさうるのへ里へ左松うへのけ
うかへ。ほんなに多くお待遠さまでした。清へナニそんな
まいお茶でも何うぞ上がりまして。久
居つゞけ。ほんなにお待遠さまでした。清へ何故ぞ。今夜
泊つて四境大不首尾だ。清へそれは気の毒さまでした。素
よりお仕方だらう。君の為めに骨を折つたのも水
の泡だ。清へコウ幸世今日ハ丁雅の徒松だ。お里の徒をして素
人ながら。今日表お待ちして垂てゞ。ぞう世話と保せるまでも徒

松方へ泊つて幸世へキヤ乱暴しやうな清へハア徒松う困る。彼奴奉
公人合わせて幾方さ。なのう泊まるわへ。ハア泊まるわへ。ハア
ふて佳宅へ泊つて云せへ。吾儕がよくいひやすよ。コウ清へハア徒松う仕方へ迎入まも徒へハイト陳
みてのみて一生をつゞけ徒へナヤお娘さんお隣の若旦那松
徒松泊つてやア大変だ。宅じやア死ぬことでもお出でだらう
徒へあゝお主さまさうら。赤頬ふ左松生作まで笠でござつて。
若旦さんうお松のことを。時々生作ぬーちやアお泣きさい

ます。まあお前さん頼まれて入ろうやアないか。不孝とやらそこぢゃ
まだ十のそこそこで思ひ盛の眼ふうるぴ泪と涙位の独で越後へ
ホレ三徳松一ぴきもるのぢゃ。ぞうぢゃ不孝とこそ
吾倚ぢ放埒親るまバとそ時くぶらひ出てお泣ひみ勉
のとりそこの勿体るひとそ哥も為ろうのトそつくそ
と処へ早仕て。泣のも反理倩でする。清ぢ励も仕派。ぢ分の記の
ゆきぢぶ。幸く奈ー七更くる思ぢ是の夕ぢぢ」。扶を役てけり

冬の月影のさるげなく。忠角ちの岡ぶ四辺之行暮くるまで
ぶ来「サアく七宿る処へ処へ」とぶぶこれ徳松この声町へ出ると。究縫とのぶ毛ぐめる
八九ぶ処へ住てナ。縫を一歩二歩だろうとそーそれ方の角の
酒屋て。空のと一升売てまそくれ」主「コレサその席ぶ蘭燭
を買てまて呉る徳「ハイく」主「若みへまア的処へ住さまへのモウ
ぬるのぢ金まう逢くるるうぢ。そうぢ
てるぐるの来「ナニ今夜ハ泊ぴとも宜ヨ徳松も一席よろ

ち人泊やう　里「まゝやア無毎さんぐ。まとの若旦那さまの
来「とゝさま丁度ご晩のるゆさ
ふ。住「ごめるうも知ん里「左様のお限るう笠けるど
クア今夜お泊りョよへ兄さん御るう徳松を先へ帰して。お里
さんの口使で。今貝八宅へ参て遣くまさうと泊りますと。
ろ　よ　里「ナゝくそうでやアありのう。ア
ちで参ても宜しやアありのう。来「ア
徳ゞ旦那さまうして垂れ人
久ろう。跳への鰻も参る処へ。丸人車坐ふ華んて泊りとうる

里「アレ幸世さんお花へうぞ手伝ふ。私だろうりおいでめごョ。
来「隣よもうく酔て。この通りご赤よ来てあるものヲ幸世
ん「の姉さんへ。不断のお供の辞よ今夜ふ限りでお辞足
だろうるまして。清「リア安そう。今夜ハ久〳〵
ぶりで。活ゞ沢山のるう。酔ちやアるうるひとりのごろう
里「チヤ清さん味方見つるう。幸世さんの最負だろうり
ふ家でるの。私ゞ行時手伝ふ泊よ泊ゞ。幸世「ナニ味るりのうまへ兄さん来

何ぞとのやと自己よお茂をうけぐ
種、むづくのくらぷ。芭くう何でもぐ
やう里「アレさんざことよ。お拓ことそ
私どもぐその仲間く這入ります
さんハ二亟で米「何拓でも飽う
でもさん多何ぐう滋ーい里「今
「何の様うる多がめるものう
里「アレお止ヨ。今ふ慈母ぐ

若旦那「ソレ迄もせず。勘さん婚礼よ仕ろ。金まり清のるのとぞ。その時の恵ひハ何程でもあらう。まさ迚ぞその人丈礼を云ふて呉まへ。私を出世一極て。自己一個死るうと思ふ覚悟ハ一つもない。ソレ迄の人ども思ひまし六ハ里ハ一ツ遣ハ其の時ハ私も喜ぶもハツと思ふて精う働くからその位ハ仕ますると私ぞう云ふところへ左様ならバ御免。何程な強ぎが出来ませう。余ほど油の紙でもあるところ招ぢてござると。私ぞもハ私世よ。余ほど油の紙でもあるところへ。最初ハ喜ぶよ私ハ助らまさ。後よ

傘の祝とやらぞみへ清「イヤモウ乃公ハ仕合ものぞ。おまけ不宅よ出ると直ぐ居なせ。けれ共ハ若旦那ハ私ぞ清楽の能弁めぞ来「コレサ〳〵まさ弁ハ慎ぐやを云出ーしョ。ちゃと盃でも流ハせ迚ふ毒「チヤお婦がござるー冷まし。さ里「ドレあく入れ清「トキニ栄さんお帰ハ何ざう平気の御ふぞ。ござるも私ごともハ。今回の一件が気よ染て。先刻しと垂世も種〳〵影して居さあぞ。まさ何程してお里さんと同伴よお出ござろ。夫ともお婦君モウ宅へお入ノ

久左衛門やア云ます米「何卒して頂戴致したいが。
お里ハ流草で笑ふ「ホヽヽ先刻和らわれ男が。お施を受て来たくせ。
ふるの清「ホヽヽ先刻和らわれ男が。お施を受て来たくせ。
姉で妻世よ笑ふ。縦箔屋の久治ざとひまし「ヲヤけ。
何ぞおん貰りでもあるまいすう米「左様うヱ。何も心配りと
りやハ丸が。ソヲヱ夫ぢやア去助うう居所を突さう和らん清
「夫ぢやア仕方ござんせ。松よ少ばかり頂戴致しませ米「十二何ど

松でも宜。モシまゝ聖ゆも来ふ。ゆくゆく居るとゝふく。何の用ざう
笑ふくおくまト活流るうづよ門口を。ゲラ〳〵ゑとゆまハ妻世ハ立
出妻世「善哉おくりクトゝふうぐう陸をあけまハ女のおみき
業示とゝて内へ通入「ヲヤざのぶ振やうざる妻世「アけれハ
お里さんがお出でま。サア早くお上りナ。後よ逢いとうくっ
先刻くう元人が接ぢゝ大きゝふをゆるがとまゝトひるぐう妻の方へ顔を出し「サアもうぐ〳〵ヤレ〳〵私も寝で
労ゝ妻世「ヲヤ寝よゝゆくお出ろ「アイ私も寝で

がま。お客を一個連て来たのサ。車「左様ク。何処の方を立
「吾儕の堕落をまア。里「慈母。先刻ら待ち居たヨ。お祐
まア何処へお出ざきし「よく来たノウ。けるうちから元人さんが
大変里「左様ざらうと思ひつちやア居さけまざきし「マアく
夫もよーサ。ドレ上らうとまた表のうちを見ろくを「サアとてグ
宅ざヨ。復やさん此苦労。まアお茶でも飲ぐお出下ませ。
上る跡より清話ぐ。周毛おとして油断。その風俗も素人
稚り。莞爾とせずと上りつ「ヨヤ元人さんお揃ひで車世「
よくお出ざまへ此間初くお目よりめろて。種く不敬をまうしました
清「イエ画月丸の跡じやア私どもをとんざ怖い奴等ざと思ひ
つたらうく「実ハアノ時ハ。居ても立ても居られませんデヨ
里「ヤア姉さんの元人さんと。おそのうく
さんと清さんとお出その。ソレ
更の跡ぐらゐ茶さんがお出そ。実ハ元人
嫌ーサ。ちよー姉と云聴とのひ。一方ならぬ恩よ。
一方ならぬ世苦労をみると手の。仮祖ーさてざろと。先刻

もそのまで女個をぐう泣てショト小時居りて茶次弟が。列席うさ
れー間政也。婚礼の夜よ機処ーへ。清語るうときーりの
うう。お里へのよく。慈縛ーて。姉と妹ぐ手をえのひ。おふね
へのとうにぐぐ。化の妻妾を信とおりひ。姉へ妹ぐ手の
出世を。防げようくーを後悔すべ。慎乱へ女みの悟ることと。
雪でくも情うや。その夜よりーて良人へ勤者。疲悪
うきへ遊女の。常とーきけど。ぬまぞふ。執念ものうと胴
夕の。苦労よつみて姉へ。姉を恨こーにの日来神ぐぬ等の

星亦もうしのと互よ絶ね係ふおるまび時刻をるーけり。茶
次弟へ女個を宅多。米ーもりくー宜いる。教田ふあそおさまおれ
沢合ご。互ふおくる丸多へ途方うーサ。それぐくまこ。差母ゆも。
いろくー影ーぐるけどぐそうおのるとて妻世
ますご滅ぐおるう。星うううこうさうー
サアお婦が出来ましと。芝母一ッ上りて。清語さんよおあげ
うさうる。さぐ。帯うううこうお夜ぐ矢くせくうりうて我嫁と
て来とおうご。ナヤ丁雅ぐんが睡さうござり。二階へ麻

くても宜らうよへ旦那米「今左拵ヨ。さア〳〵徳松やそこ方へ
二階へ往て寝ろ寝ろ。孝世連てく往て
寝ろ。尿でもして寝くさう徳松「ハイ〳〵うゐ〳〵
ナニサ寝ろ〳〵ふ疼みヨト二階へ落く徳松を疼うす清「何と
モウそろ〳〵お斤舟とて。跡ハ疼みさうぢやア
ねへか米「左拵サそまでの宜らう。サアお銚子お肴方お個で
斤づけヨト清路お里ろ寝くつる「アお拵お上んろさ
るナ米「イヤ自己ハモウ宜。お里的でもして寝ろ。久〳〵ぶりでつる

「そまでやア姉さん。チヤこりや悪り里「爰ゐ姉さんざよへ。お
拵の姉さんとハえゝ分ろんざらうぢやア
んの本妻ざらうの姉さんざらうぢやア
悪ーておくまへ。私ハ本妻ぢやアるのハつるけそして何ざエ。お拵
いろ〳〵ざれを乎かしぢやアるのハつる里「イエ仕拵と思ふとっお
拵ろ私慶をおらまそで。夫ツ限ざものナつるまでもお拵が
お拵の本妻でござりますよへ米さん米「ハヽ〳〵何拵ざろ志
らね。是サ何を云のさナ。何方でも宜ぢやアるいう

閑情末摘花第五編巻之下

東都　松亭金水編次

第九回

「ヲヤ〳〵ドウシタノダ。ソンナニ泣イテハ分ラヌ。ドウシタノダ」ト抱キ起シテ見レバ、米ハ一ト目ヨク〳〵久治ノ姿ヲ眺メテ、「アヽ久治サンカ。マア能ク来テクレタ。ヨク来テクレタ。ヨク来テクレタ。ヨ

四月ホド経ちまして、ある晩の事でございます。
幸「アイ〳〵今晩ますヨトを焙を焼いてそれを引出しを一おくん
久治さんハ二階へ左様久治さんハ二階へ
右衛門さんハすぐ幸「アイ居ますサア〳〵お這入ト云ふ義理
ございます。久治へ幸世を見て恟り久「ヤアお祖さんも
あゝ丈一所よう笑ひ合ふ時。お祖さんハ幸「ヤア
とうやアさんざるよ幸「恟ろう。サア〳〵方へお上り
久「ハイ〳〵実ニモ〳〵お痛ましい事でございます。

ん持ざろう。遅くに来てさぞ草臥でございましょう。
さ。自己もお祖よ遅く。様〳〵と幸「ヤア久さんよく来て呉
幸「且那ハ何様なさいました。久「実ニ悔しくッて。夫ゆゑ
ハ二階へ寝ました。幸「ヤレ〳〵夫ハ気の毒な事。ヤア
久「ハイ〳〵実ニモ〳〵お痛ましい事でございます。
ございます。小言を百万べんでござりますト次の間ニ居る。伯父の吉助が

てをるゝ人。助ことゝ出せバ吉助へ。何時ぞや
新乃ん。米次郎ハ又く狗ころ
らぬ乃舞。夫じやア久ゝ左板サ。坊主ゆでも奴ゆでも。ゑゝざアるり
ますめ二俵くらゐハ。兄つまやア。お旅板くらゐ金ぎるゐ
ず俵でゝ。お情ぢのろくを取ぬしてそ。まゝ万ちやんと同志ゝて。
お旅板を悪よおとゝ。盤ゞ貝ハ先も角も。アさゝ。書てお
旅板を。宿るゝゐまごやナございますんゝ。私ハ固来のゐ。

おふくろ様も様ゝ四見よ。ゑゝ居るゐハ。伯又も亦ゝ居まぐら。
金ゝとゝ人バつまらぬ。徐方。そまそ伯又も先非を悔でゐる
ゐどお旅遊よ左板いたまくゝ。ゑゝやア。一ぢの云訳も終ゝ。米
さんもさそ自ゝ。悟のと思つくお在なさるごらう。その云
ゐ通ハ是でするゝと。髷をつかめくて根くら弗つり。逆のゝとゆと
利刀でぐるゝ坊主と来ます。ゝモシ旦那ゝさそお腹も立
ます。ゝらう。伯又ごこの通りの姿よります。ゝら。是で
何の卑怯忌ゝてお呉なせゝ。米「コリヤアそんざるゐざゝ。勿論

さすけ
左助さんぐ。桐生の伯父と同志ー
きのう
へ。清話うらんまーく咲こ。ぎんざら賑ーくも
さすけ
何も左助さんまうこぐ悪いのぐやアるー。
それ
自己ぐ方ぜ。ニへ五叔父をたもうとーこのグッイたあ
ぞく
つこのぜ。俗よりの人とる魂ぐ人よこそ
さすけ
左助さん。をまぜやア赤こく気のの毒ざらこのトを助ぐ方を
を
兄ぐまぐ。左助へ利こくの天窓ぜくと振まるくー
いまきんぢ
今ぐ治ろうやと通り。私ぐ名ーさんぢちびぜ。何卒四名

るすゐて下さのまー 茶「実ぜ今ぢ通りサコロくく清話もお里
もあく春ぜ左助さんう三位さ
左振でこさいますもクヱトぬ奥より春ぢ六お里も春ぢ「左助
さんぜるへ左ぜお春ぜよ面同お「ヨ久「お里さんも何卒
嬢思ーて巻くお気ぜ廿、「十二私へ左振へ三そも。ろくく
お世話よろうて居るうら。嬢思もの春のへ乃ます。よ
ものやぜ振なとよならうと六男ぐ咲ぜへ。お振さん
ぐこの仕組ーやアないと思ひまーこのサる「私もサ。全幹万

なつさんが金まりを人ごと思ひ千ちよく
ちよくそこそこで且那伯父
ぢがこゝへ。まつくそこで泳ますのさ。とふ一ツ古今稀代物
不測とりの理がありますのサ 栄「ハアそれア何ふく久ゝどう
もサ。おらの美双紙の。人情本ほどもめらうとの理さま
「ハテあのごうつくばり。先須ソレ例の川
時へ出ようけましてうう 栄「今大師河原
大師さまの。位んを。おらの乳母で
汗が流でおく怪家をそこと是より鈴の森ゆく

流よ行のも夫も知ぞ佐サ。旅籠屋へ泊りて寝つまり。
寛速男りく伏やうく今日ふ知りて紙屑の中ふめる。
昔の反古ようお滝ど月のうくを拾くまで遠くか
くべその在の人くに奇異の思ひをさす内中も栄
次郎へ一方ふ飛び栄「ハテそりやア稀有ざあ。たゞふく
左拍と知りやアふ拍ふ泥縄も出来べ。双方まふく納ま
る茶ぶ汁が垂「オヤ左拍うく怪うるのようへそこしやアモウ
そうと白羽根町へおひく久「イヱ今日のうちそこう

ゆうべがよう
雑さる盤小
わりん赤心
ゆめのごん
右申
きうしん

なちせ
米びや
おさと

見へるまません。ア登とも早く米さんよお初く色きう
と思つく。夜中初くて春る位でござるまをりまつる
久さんをまこでやアお姉様一人ぐ善平を仕く居て。その
お隣で元人ぐ気を揉ぎり。縫をまさう仕さんざる。久さん竹
川さんよりの悴の方ぐ至ございまをうる久「く遠へる
しくこりやア摺ツ売しのざくまんと。藏娘と一ツまる
らないまをしオマきつい悦悴ざ。何ぞお春り米「コサ経こし。
もと私ぐの久ご。叔さんも音俤へのまこまめ。外らの容ま

まこと変ちやア。実よ気の毒でるるめ。そで自己の伯父様
ぐ軍男ろう出てこめて。ア吾助さんの方の罪ハ憎いス。その
憎いのろ姉をまろて。本人ゆまやアく。そて至も気
ぐ利教ろう姉の方ゆして世間らして笑くサ。その
上家も流もお花の方へ舎蔵と理を吸して。伯も角も一
許よ国園とのよ。埋座中しさう伯様ざらう。その報向ニア
私ぐト家も潰せぐ息吹久治吉助坊主も堂をうんて。
事産承知しまりへ。さ有ぐの雑法よ。夜も自ぐと眠

けとび。久治はやがて吉助を使ひ。白羽根町へいそうて万吉
ろうよ迄。吉助が宮の森迄久「さて福さまをけ
さつとび。伯父が急ろう病気。お前様よ特まれて。清
ぐ発足をさつしや。追く〳〵の悪巧。茶さんを
追出を陥入れんとやさー〳〵と申すこと。委ー〳〵と
さびと共に不残仕舞のるやうにと。サア明日途中で茶さん
よ行逢ますと。茶さんが仰の外の気色でコレ吉助と
今ろう手の宅へ行ぐ。浅草よ隠して置清蔵も

そるく 坊主よ 寒さうだ まだでかし
ざとまで 送ます 判さよみるう 姉
でも 如縣 行く 近のでぐ 梅生の 伯父が 路まで。 行くねつけ
やう 望うれへと 言て。 往生の 安う
もざ サ 大変じやア。 驚うら 高賞も 半びぐし
さう 望うとこそく。 私の 方へ 乗うます とうぶんまへ 男くへ
胆が 浮き。 種く 理屈もやしみどご。 海の 多りて 役よ こだアア
と 充も 角も 此 始末を お花よ お影中て。 此不法と お傷やさう

と 思つく 来りまーと 表面よ 落て 活表。 小男ひ 掛終ば 万
ちひ ちう 小 主助が 宮よ 帰りし。 まと 一ツ おハけて を 如縣 所へ 云
そ そうまそ そハ 仕方も 滅ぶと 人の 理ハ 極るねど。 不得法 定者
るまでぶし 「何ど お助さんも。 金まり
の ないど 彼れる 奴う 彼岸 もるう。 訪き 例しそやまバ 至
ふ。 坊主と ハ 情るいナ。 そして 乳の 法工。 用ど が工 如縣 所へ
行くるう。 現在の 伯父よ 對して
弓を 弾うさつて 誰が 元あけるもの。 加傷 お助さんよ 内証

を悔んで。清話と振返しさのハ。世荒療治ゥも志ゥ丸。分。
け方ちゃア仕一人の女児と手こて居るゴけど。十方でも
そまよ。ゑゑく。彼女よ絶と吹せくやらァ。る麻くくしい
針の仙エモシまハ茶さんと。お招とのお迎まで。ヤさバ私ともの
し。幼つとろ。ぎのまゐせん。今朝態くく参つと旨ゑハ。お
のさん。赤浪よ悪巧を特ままとおろまで。伯父がこの為体。ここの伏
と仮根ろうと分くく笑てお。ゑゑ。モシまと不分解ゥ挨拶
るう。茶さんハ仏ゑ私ら。ゞとを休つくお初を交ませうト

了得久治ハ東み。こそ尖く云放せバ。万左ゥも今さらゥ。
当越しそ居ろうける

第三十回

折ゥゥ障のあくハ春るこの家の母親。久治と
ゐよ多渡ゑ新ー母一仮ゥの容みハ次の室で笑ーと
が。今丁稚の徳松が。ゆくく来て お里が口復きのみ不当
茶次帝ハ捷さ而。今も久さんのゥ通り。伯父さんを恨よ
思つく。恵よ和様ゞくよ。弧処とゐのを。種くゥ家ゥ題ー。

出る迄出さるゝ。苦も無も白ざらうが。そこへ他人同志の二。叔姪の親しの中で。血で血を洗ふやうなもの。さて〳〵ア和睦迄の仲二。少し後ずさりするうら。浪風を一ふ固同さ。ちぞお辛抱でありうと云。おもふ。ら。もぐ和睦所く出る。サテ何れにても皆入る〳〵。今朝は是非〳〵和睦せまづ徒松を。生く〳〵とらそぶごぎります。夫ゆへまづ徒松のまゐりをと。相待ちて上ますもの。勿論最初は我任で。

お濃殿を始うさうら出来さるとも云ろう。叔父と甥の間の別条で有る筈迄。内伝ぐ徒出し。扱も〳〵余まり狂気ぢみ来るてござやアござの升せんう。彼が思ふくいかるゝ乃を。立派よとて。動揺するゆりと。夫ゆ上よ立人の不法吹升。そこを伺ご二枚目の。故役でも仕さうなお斗らひい。埜松どもの勝ゆも病升みしほ〳〵ぬ〳〵。巧のおとの板立一さよ。小結を三ぬく〳〵頼えつゆまへ万方ちつへ結立率して万一イヤ底毋

今モて居る女房ゆらしく物ごしさへ。一ト通りハ知つてゐるわの。其筈アノ通りみそこなめへ物者くる娘ざ。程乃ヲ。そこらの人ハ出入みけるやうな米次郎。今更加之奴と云条。あの伯父ぐ云ひ、人ぬ「何故まことをせね。米次郎が我侭ぬよ。とるのサ。ヲをおろして殺しこそせね。寿お流ハこと追出してトのヲ久治ぐ引とうて久「ヤモシくお言の中ながら。そのお流さんぐ実意で居ると時ハ。何程

みさる立方「何程まるものう。吾ぐ女児のやうな。吾ぐ久「左様ーそよ。米さん斗りぐつまらぬ。方「紀のこと思つよ。唯ーもおるどる庶ヲ児ど可愛と。弥三の通り。分の米次郎せ。ヤレ米ヨ。ソレ米ヨ。と十ヒ迄母ぐやアるやう。況こそお流ハ紀者行で。寥然な生まゝろき。夫ヲ云ーさ吾ぐん中。推楽して下さま」久「をまゝ米ど也ヒ。まぐ腹医よ。這般ヲまるこのも分て居ますぐ。其時ハ。何程ますめ人ぐ。其時ハ米さん

の男を伝兵衛さまとやすもの
万一 活く居そ。あく迷ふ
吾が勧解して宅へ入れ。
そこもよー。そこで
肢のこと。大人にして男子
や。望ぐるくば吾ぐ引
処で右助がこの天言ハ万一
夫ハ当人の行状でござ

らねと六作ますの。お情をうけて悪巧の手伝ひを仕ざりで。
山始末米さんよ旦那さまく。お流さんが近出ーさらっとモシ死ねで
米さんと。解死人よまると今作さう。右助の天言もその
理トこまかい笑ひを含こ万「イヤ其ハ弱い。
ね在のない利発のの。る。右助ぐの天言のこ万よ一
ツもお流ぐ毛の生るまでの手究金百両でも二
百両でも。望ぐ男をせませう。ぐくその仕りお流の汐方ぐ如
ま私けるや。天言の利損。そりやアどうも塗方ぐ如 久

「まるくべそを掻の仰文を下さいます」万「そふ〳〵入ッしやいまし。ようこそ御出なさいました。この万右衛門ことをこねるなどゝは男ッやない久「いうさ又左松でござりますせうがイヤ是ハ早朝からおつゝけ山嶺ヤますせうトこの家の母みも嶺を苦労。汁ちぐて入来るふりの中より忍く徐〳〵と。奥へ通る。傾城清路その先形もそこそこと万右衛門を見て「お松様ハアるゑ来らまいどやアまんまも万右衛門を見て茫然ひるまなんぞへ。けるゆうべ戯度を聞を出ましても一向

返事もなし。早くあの宅へ入〳〵お呉るまーな。余まりぞろとうざまひろ〳〵。今日男ひきろ〳〵参りましょ。化正猫も何ぞ有ますさうるユ。何猫とも早く〳〵てお呉るまーヲトゝ云て傍へすると万右衛門「今矣よ。母の入る間もいと〳〵く。白眼つけ「嶋岐などもと云るゝ。余まりおとなしき奴ぢ。左松る。後ろ方ゝ。俚俚とうけるものゝ。横山方も元江戸へ。安んしーてへ。その時ゝ動揺ぶつるユ米さんへ勘当と云。其ゝ

おさりけてト云を侍うち母親がよろ
貽未万ちつが巧このことまで云けれ
が侍まこよう。左拍いのとへ
まこを就度よ米さんを。勘當させておまへの仏根。そ
悔一のト意ろう卿ちつまろ狐よ。万をつへまこ矣よ。當
越みそ云旬も出べ。母いんよ
理づく。清話を吐つとう。まこ駆一とう洞をそ〳〵悪いかう
申せまのとう。まづ久つてと曉さまこそ。清話へこのごり。帳

もさくとまくよ。僕ふうち家
是こを米次郎と久治ゞお銭ゆく。万をつよ困こせ
且血をみて。その意話をまこまんとの外とひとう
跡鬼おくつ母ちつゞ「ハテサテ今日へとくる。る森のゝ
日ゞこ。爲母さそ板が立こちらう下苦こ切よる顔をこて
母「元ことのへ米次郎と。幸世ゞ悪のくう記つこる。法ちお
拍板斗をこ限む乃理もどざうまませんトひも終こねよ
まこ一挺の僕をとるこ映こあべ。とりやまこ何どやと鬼

やる処よ。跡より参るお
客ちやうよ目礼し久八サアお流さん
と連て来ますとひつて
後の座をめざすべつお流へはよ袖をめて面目なげに内へ入る。
きやうはゞ泊まつて。是へぎやうしやと最う平生母も立出是
まで久治どの。親みの世話ゆ来て居さのう。左様よ志ばて
この親又八。事後でも投ろ処もなく。凶児ふ
変作まく。治らうとも思ふまいと同くの業ど。もう一ようて
みやこと了得父みの残せへ。のふよいそこね所也。万ちやんが
今迄ちまち解る筈氷の朝日よむつみやく也。やく
るで居やうとへ思ひねも志よ種くの。巧をみて人くよ。遂
越ひけーと今さらふぺナト後悔の面持ち。この時久治へ
采次郎が。母親小向ゆも立文みさうと亜り。お流さん

さく。島までで居ませう。何卒米さんの
心の動揺を。休して同出さく四郎兵衛も何と
云ふ。動揺の仕するゆぞ。母の元来悩しとさく。せーこと
ば。忽ち悪事。伯父さんの心が解。左様仕給へ。
私よ。存。細ハ。とのよりて仕松と。思ひ。
せそ。米次郎ハ。火。久。吉見と擇び
てお呉と。懇切をさし。諸話をぎ。思が。
とも安楽よ。ささせける。こゝふ。万吉と米次郎の中ハ。

元の如くうりーふより。米次郎ハ久治とお淀ぐ。縁のことを媒
もろふ。お淀ぐ方よ。元てハ。大引のある久治より。殊よ。淀き
契りを結びとることをよろこべとそ。
改めて久治ぐ方へ送りとる。万吉の本統を貸わさ
。久治よ。呉服店を開久せけるよ。日く繁昌して栄ふ。
然ま。久治ハ折を見合せて。
母と万吉よ。託入。旦清ぐ助ぐ為のうへ。
も早速相決そのハ。助も本宅へ帰り。久。幸世ハまぐ米

次第ゞ方〳〵へ送りつけて改めて。清き助ゞ方〳〵へ送りつけ
ませう。世の変るまでハむろん活きて生て。なほ〳〵き毫を返さうべし。
曽て方寸ハ世の変ト者荼海丸物〳〵も相変の礼をなし。を
髪の生るまでの多完として。金二百両を送り。母を世
清き助ハ泥町の亀屋〳〵先頃の礼として。数多の金銀衣裳
など送り。十一郎よ拠り合さる人〳〵。多まくれ安楽の月と
なりしハ。月出度申をける次第なり
閑情末摘花第五編巻之下了